

### 3. 漢字——この易しさと面白さ

#### 子供の目の輝き

一年生で、一年かかって、かなが一字も覚えられない子供がいました。ところが、この子供に、漢字を教えてみたところ、急にその

目が輝き、どんどん覚えたのです。

“雲”と“雪”を間違いなく読み分け、“鳥”と“烏”も間違いなく読み分けました。“門”という字など、ただ一度教えたただけなのに、覚えてしまいました。

これには、私も驚きました。しかし、学習心理学によりますと、記憶

コラム

#### 部首 萑 藿

艹(草)と隹(鳥)と口(たくさんの )との会意形声字。草むらで鳥がカンカンと“しきりに鳴く”のが本義。部首の意味は“しきりに”“熱心に”“心をこめて”。

【勸】 “熱心にすすめる”。力は人名で“つとむ”と読むように、“つとめる(努力)”こと。

するために第一に必要なことは“関心”です。関心がなければ、どんなに学習させても、また学習しているように見えても、実質的には決して学習にはなっていないのです。

智能が低ければ低いほど、抽象能力が劣るものです。従って、抽象的な文字であるかなには興味が持てず、心がかなに向かないので、「くも」「ゆき」といくら教えたつもりでも、具体的な、あの「空に浮かぶ雲」「降る雪」と結び着かない。ですから覚えられないはずがないのです。

ところが、“雲”や“雪”だと、よく知っている物であり、言葉ですから、“関心”が持てます。“関心”が持てるから、それが心に残って、読めるようになるのです。

つまり、かなの覚えられない子供も、漢字ならどんどん覚える。このことを私たちは実験によって確かめています。

#### 漢字の絵本は喜んで手にする

漢字には、以上のような性質があるので、幼児に喜ばれるのです。つまり、難しいもの

では全くありません。努力なし、負担なしで覚えられるのです。

ですから、絵本に、かなばかりを使うことは、わざわざ難しくし、面白くないようにしているのです。もし漢字が多く使われていたら、子供たちがどんなに喜んで本を手にするか判りません。

私が、このことを、絵本を刊行している有名な会社の人に話したところ、「おっしゃることはもっともだと思います。ただ、それでは世の中のお母さんたちから文句が出るでしょう。買ってもらえませんか。だから、それは出来ません」ということでした。

幼児開発協会の理事長をされていた故井深大ソニー会長が「母親が考えねばならぬこと」という講演の中で「今日の教育というものは、わざわざ、子供にとって解らなくなる、あるいは難くなる年齢まで待って、それから一所懸命やらせている。子供が受付ける時期を過ぎてから、一所懸命詰込もうとして、親も学校も社会も苦労しているのではなかろうか」とおっしゃっていました。この指摘は、漢字教育だけを取ってみても、正にその通りなのです。

幼児期に学ばせれば、全く自然に、覚えようという苦労もなく習得し、そのために楽しく読書できるようになるものを、記憶力の衰えた時を

待って学ばせているのです。この誤りからも、まず世のお母さん方が脱出していただきたい。それは子供の将来のために、想像以上に大事なことです。

漢字があると理解しやすい

漢字教育をしている幼稚園のことです。

節分の日に、黒板に“節分”という字を書いて、先生が話しました。「節分とは、季節の分かれめという意味の言葉です。冬の季節が今日で終わります。寒い風の吹く、いやな冬、行ってしまえ、という気持で、“鬼は外”と言って豆を撒くのです」と、園児の一人が「じゃあ、“福は内”って言うのは“春よ来い”ってことだね」と言ったのです。

その次の日は、“立春”という字を書いて「きょうは“立春”の日です」と言って、その話をしたところ、こんどはまた別の園児が「こよみの上では春だけれど、まだ寒いね」と言って、先生を驚かしたそうです。

言葉は、言葉として説明されただけでは理解しにくく、記憶にも留りにくいものです。ところが、漢字と共に説明されると、理解しやすく、ま

た、記憶にも留りやすくなります。

“節分”が“季節の分かれめ”であり、“立春”が“春の立つ日”であることは、言葉だけの説明では決して理解され記憶されるものではありません。

ところが、漢字と共に説明されると、幼児でもちゃんと理解し、言葉を漢字と共に記憶し、それを正しく生活の上で使えるようにまでなるのです。

応用問題を解く鍵

石井式漢字教育を行っている小学校では、一年生でも算数の文章題(応用問題)が実によく出来ます。クラスの大半が満点

です。文章題をやるのが楽しくて仕方がないのです。

普通の学校で、文章題の成績が悪いのは、問題を解く力がないためではなくて、かなばかりの文章なので、読むのに苦労して、読んでも意味がよく判らないので、式を立てることが出来ないのです。

それは文章題の点数0の子に、その問題の文章を読んでからやらせてみますと、すぐ判ります。たいてい、すらすらと式を立てて、正し

く計算してちゃんと答を出します。

文章というものは、全体をすらすらと読み通さないと、その意味が判らないものです。ですから、一字一字、かなを拾い読みしていたのでは、何をどうしろと言われているのか、判らないのです。つまり、問題を解く力はあっても、式が立てられないのです。

ところが、目で見ただけですぐ判る漢字を多く使った文章だと、すらすらと終りまで読み通せますから、すべてうまくいきます。漢字教育を採入れたクラスのほとんどの子供が満点を取れるのはそのため

コラム

部首 雨

空から垂れ下がった雲間から水滴の落ちる形を象った象形字。音は宇(ソラ)。

【雪】 ヨは手を表す。手の上に載る雨。雨は手に載らないが雪なら載る。

【露】 雨ではないが雨粒のように路上に置かれる“つゆ”。

【霧】 務は無の意味で、有るようで無く、無いようで有る“きり”を表した。

す。

文章題は嫌われがちですが、その文章がすらすらと読めて意味がよく判れば、単なる計算問題よりずっと面白くて好かれるはずです。

このことは、算数の文章題に限ったことではありません。理科の学習でも、社会科の学習でも、かなばかりで書かれているために読んでも意味が判らないとか、反対に、漢字が多い参考書だと、漢字が読めないでその参考書を十分に活用できないとか、そういうことのために出来ない場合が非常に多いのです。

この意味でも、早い時期に漢学力を養っておくと、漢字を多く使った、本格的な書物を早くから読むことが出来て有利です。幼稚な書き方の本よりも、本格的な書物の方が、読む力さえあるならば、面白く読める。面白く読めれば、読めない子との間に格段の差が生じ、その差が拡大していくことも当然でしょう。

大学院で宇宙工学を学んだ私の長男は、石井式漢字教育の実験第一号で、幼稚園のころ、すでに小学校四年生くらいの本だったら、楽に読めるようになっていました。

そのため、小学校の低学年のうちから、解らないことは自分で百科

事典を取出して調べるようになり、特に興味を持っていた理科方面の知識は、学校の先生を驚かせていました。

彼は「自分が数学や理科が得意になったのは、父の漢字教育のお蔭だ」と語っています。漢字教育が国語力を育て、その国語力が宇宙工学の世界の面白さを私の長男に与えてくれたのです。

先に引用した「科学や技術に限らず、あらゆる学問が進歩する根底には、国語の力があるのだ」という朝日新聞の社説は、単なる理屈ではなくて、事実の裏付けを持った主張なのです。